

Media Grove

21世紀におけるインディーズ雑誌

創刊号

Editor in Chief

企画・投稿作品掲載

Independent Works

インディーズ情報掲示板

inde-X

このスペース、使ってください。

使い方はあなた次第

ご相談・ご質問は・・・

広告室 E-mail: ad@r7.1r.net

* ホームページへはこの広告をクリックしてください。

大きなスペース

最大で「A3見開きサイズ」の広告スペースが自由にお使いいただけます。
インターネットの広告にありがちな、文字の数や大きさ・種類や
ファイルサイズに制限などはありません。貴方のイメージを最大限に
生かした広告をそのままの形で読者に伝えることができますでしょう。

297mm

白黒 カラー

使う色の数や種類に制限はありません。
メールマガジン等では限られた文字で組み合わせた白黒の広告しか
表現できませんでした。また、インターネットでは使用ブラウザにより
色数に制限が生じます。貴方の発想で適した色に適した場所に使うことによって、
読者の視覚にうったえる広告ができるはずです。

148mm

選べるサービス

広告に合わせて、クリック保証型・定額料金型から種類を選べます、
また、オプションとして長期契約割引などの値下げをいたします。
料金はA4四ツ折サイズが、クリック保証型では1クリックにつき100円(*)
定額料金では1,000円(* サイズとリーズナブルな設定になっています。
貴方の広告に合わせて、適切なサービスを提供できます。

* 価格は変更されている場合があります。ホームページでご確認ください。

74mm

210mm

PDFの正しい読み方

目的の内容への移動には・・・
「しおりやリンクを使おう！」

まず、あなたが見たい内容を探さなければなりません。次に、見たいページが見つかったらどつするのかが、これらを簡単にするテクニックを紹介します。

「しおり」とは、文書内の対応する部分に移動するため
の見出しです。「パレットの表



パレットの表示 / 非表示

示 / 非表示」ボタンで「しおり」を表示してください。目的の見出しをクリックすると、対応するページへ移動します。

また、目次や文章中のキーワードはリンクになっている場合があります。リンクされている単語の場合は、マウスカーソルが絵のようになります。その単語をクリックすると関連する文章へ移動します。ときには、関連するホームページへのリンクにもなっていることもあります。この場合は、「ファイル 環境設定 ≡opリンク…」においてWebブラウザを設定している必要があります。

では、実際に試して見ま
iboard with
リンクの時
しょう。次の文字をクリックしてみてください。URLの方は、インターネットへの接続と設定が必要です。

表紙へリンク

<http://r7.1r.net/>

ページを効率的に読むには・・・
「アーティクルを使おう！」

読みたいページが見つかりましたか？見つかったら、ページを読みやすくするテクニックを使って読んでみましょう。

「アーティクル」とは、文章を流れるように読むためのサポーターです。アーティクルが設定してあるところでは、マウスカーソルが絵のようになります。そこでクリックすると、文章の最初の部分が読みやすい表示倍率で表示されます。続きの部分を表示するには、マウスをクリックしてください。「S」キーをクリックで戻ることとできます。アーティクル表示を止めたい場合は、コマンドバーなどで表示倍率を変えてください。



アーティクル

尚、アーティクル表示中の表示倍率は、「ファイル 環境設定 一般…」の「描画領域のみを表示する場合の最大倍率」で変更できます。

実際に、このページもアーティクルを使用して作られています。利用して読んでみてください。設定を読みやすいように変更することも大切です。

それでも読みにくい方へ・・・
「紙ご印刷してみてください？」

当誌では、当PDF所有者による個人的な印刷を許可しております。

パソコンの画面ではどうしても読みにくい、またはこの記事はじっくり読みたいなどの場合には、印刷する方が良いでしょう。

印刷をする場合は、コマンドバーの「印刷」を押してください。



印刷

お手持ちのプリンターで印刷できます。用紙サイズにより自動的に拡大・縮小されて印刷されますが、文字の大きさ・読みやすさの点からA4サイズをお勧めいたします。

尚、当誌を印刷したものを再配布・無断転載することは禁止しております。印刷は個人的な範囲でのみご利用下さい。

友人や知人にも見せたい・・・
「再配布について」

再配布は、このPDFファイルで改変を行わないオリジナルの状態に限り自由に行うことができます。オリジナルがどうかは、メニューより「ファイル 文書情報 一般…」を開き、更新日時をご確認ください。PDFに変更がない場合、更新日時は目次(この後のページ)の号数表記のそばにある更新日時とほぼ一致するはずですが、一緒ではありません。

尚、当誌を印刷したものを再配布・転載することは一切許可いたしておりませんが、したがって、当誌に似せた印刷物による著作権の侵害などを発見した場合は、直ちに法的な対処をとらせていただく場合があります。印刷物の掲載・転載の許可に関しては、お気軽にご相談下さい。

Mediagroove 編集部 [mg@r7.1r.net]

コマンドバーの説明

一般的な移動の方法



最初へ 前へ 次へ 最後へ

表示倍率の変更方法



実物大 全体表示 幅最大

スペシャル

Editor in Chief

~相沢 裕貴~

Independent Works

「夢仕掛けのサラダボウル」 マキロン
「一輪の花束」 日下シオン
「Over The Hrizon 第1話(2)」 R7 project

- P D F の正しい読み方
- 投稿掲示板 I n d e - X
- 編集後記

目次を読むときの注意！

この目次は、「しおり」と対応したリンクになっています。読みたい目次に対応する「しおり」を選択するか、目次をマウスでクリックすると、そのページへ移動します。

AD. INDEX

このスペース使って見ませんか
MediaGroove

実現するか！？ 企画段階項目

, Indies Band 紹介コーナー
, HP サイト連動コラム
, MediaGroove Radio
, 同人誌紹介
, Novel to Novel

21世紀におけるインディーズ雑誌

Media Groove

表紙

相沢 裕貴 (MediaGroove 編集長)

Photo: 青羊

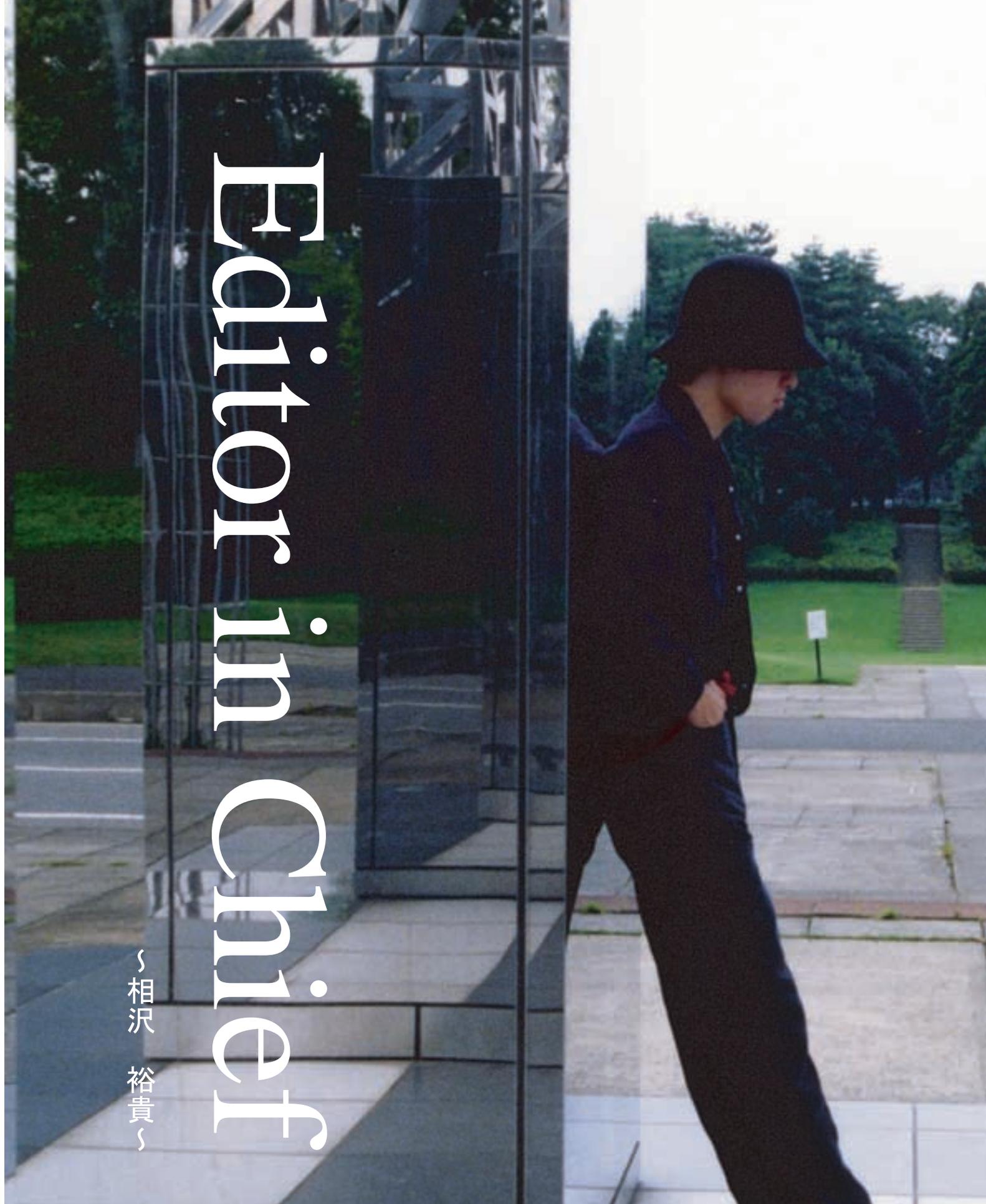
創刊号

作 成 1999/10/25 2:21:54

発 行 1999/10/25 3:30

発行元 R7 project (mg@r7.1r.net)

(C) R7 project, 1999. 禁・無断転載



〜相沢 裕貴〜

Editor in Chief

「はじめは自分の意志だけでやっていく
「おわりはむしろこれからやっていく」

MediaGroove 創刊 僕が、このようにコトッ
号をお読みの皆さん。
はじめまして。

この度、メールマガ
ジンという既存の枠を
超えようと、あまり利
用されていないPDF
を利用した、カラーで

雑誌さながらのマガジ
ンを発行することにな
りました。世の中に対
し、また自分たちに対
し革命(=Revolution)
を起ごそうという意味
での「R7 project」も、
結成して早5年となり
ました。編集長である

僕が、このようにコトッ
プを飾っていいものか
どうか非常に疑問です
が、最初から気合いを
入れたということ、
ロケを敢行。私たちの
活動を広めるきっかけ
になればと思います。

さて、何かをはじめ
ようと思うのは、僕の
場合ちょっととした思い
つきであることがほと
んどです。大概寝てる
ときか暇なときに、ふ
と頭に思い浮かんだこ
とをグループのメン
バーに口にするだけ。





それでメンバーの反応が良ければ、実行しようということになってます。(自分の中だけで…)

こんな風に、気軽に足を踏み入れることができるのは、インターネットやパソコンのおかげでしょう。皆さんはどのように感じているか分かりませんが、僕はパソコンの最大の利点は、どんな人でも簡単に作品を作ることができる。つまり、「自分の中のイメージを容易に形にできる」ということにあると思います。そして、インター

ネットは、どんな人でも気軽に作品を発表できる。これはまさに、全ての人がクリエイターになる機会を得ているのです。僕が、ここまでインディーズにこだわる理由もここにありません。

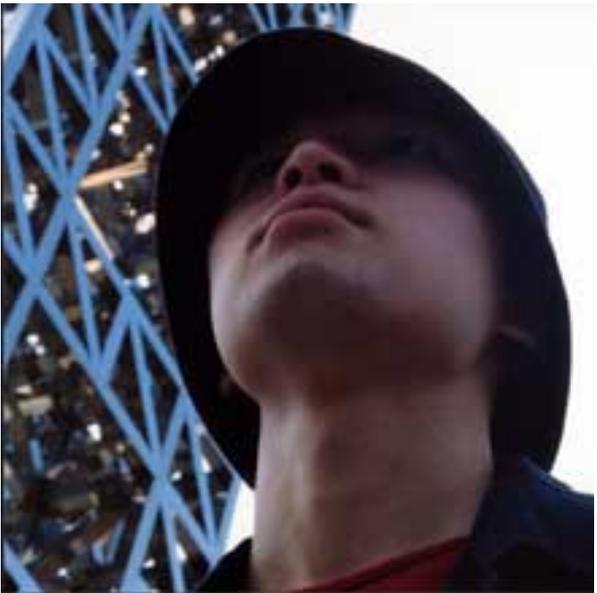
私たち自身インディーズグループであり、その中で自分たちの自由な発想で活動を行っている。多くのインディーズの方々もそうであると思います。しかし、1つ1つの活動では小さすぎないでしょうか。僕はそこに憤りを感じます。

もっと多くの活動が目に見える形で集まって、互いの作品に感激して、一緒に競い合って…、そう、ある種コミケのような感じで活動が見えたらいいなと思いました。

まれるのではないかと思っています。そこまでは何年かかるか分かりません。気づいたときには、失敗しているかもしれない。それでも今は、ただひたすらにこの活動を思いっきりやっていきたいと思えます。

今回のマガジンは、そのような願いを込めて編集を行っています。この雑誌が成功するかどうかは、その思いがひとりよがりではなく、多くの方の希望であるかどうかだと思っています。多くの方がそのよつな意見を持っているのであれば、このマガジンは多くの方に読





相沢 裕貴

高校の時に運命的に出会った二人の親友とグループ「R7 project」を結成し、クリエイター活動を開始。以来、グループで音楽・コミック・小説・アートなど様々な制作活動を展開。現在、インディーズを対象とした電子雑誌「MediaGroove」の編集長として活動中。

本文は、彼のページ「JIBUNRYU」から「MediaGroove」に関して書いたエッセイから抜き出し、当該のために書き加えたもの。

詳しくは <http://r7.1r.net/yuuki/> <

ここに掲載されている写真や文に関するすべての権利は、相沢裕貴に帰属します。無断で引用・転載することを禁止いたします。

詳しくは mg@r7.1r.net <1>ご連絡ください。



21世紀におけるインディーズ雑誌

Media Groove



バンド名: Jun Sound Recordings
アドレス: june@root.or.jp

募集地域: 全国
募集パート: Vo, et c 作詞

当方、作曲&編曲(男)です。曲はロック、ポップス、Drum/Bass系にのめりています。プロ指向の女性Vo、作詞の方を募集しています。年令問わず、自分の言葉で自分の声で歌える方を募集します。当面の目標はライブよりも、デモテープを作成して売り込み活動&CDをリリースしたいと思っています。お気軽にメール下さいね。
http://www.root.or.jp/june/

代表者名: whole in head (hiron)
アドレス: hiron@itk.zaq.ne.jp
募集地域: 大阪
募集パート: D

ハイスタのコピーを、a2とa2の二人でやっています。いままで10曲ほどいけるまでライブもすくいけます。若者男女上手い下手問いません。場所は梅田です。時間もみんなの都合に合わせて月1~2のペースです。バンド内の雰囲気大事にしてるバンドです。これを見てる君、一緒にやってみよう。詳しい内容はメールで送ります。

バンド名: Light Music a Circle
アドレス: cbw55000@pop21.odn.ne.jp
募集地域: 北海道網走管内(北見市に1)
募集パート: G, D

メンバーは現在7名(アコデオン・マンドリン・マンドラ・ベースギター・尺八)などでやっています。おもにお年寄りのいる施設訪問をしています。懐メロが多いですが何でもOKです。毎週日曜日に練習しています。長く私たちがいっしょにやっていただけの方お待ちしています。

代表者名: 咲夜
アドレス: ss.sadies@pop06.odn.jp
募集地域: 東京・埼玉近郊
募集パート: G, B, D, K, Vo 加

バンド名: WILDCARD
アドレス: BXM00276@nifty.ne.jp
募集地域: 東京
募集パート: G

オリジナルのロックをやっています。WILDCARDでは、キタリストを募集します。54~70とした紹介とRealAudioに44.1kHzサンプリングを用意し共2つのwav http://member.nifty.ne.jp/WILDCARD/index.html

代表者名: 125566 (男)
アドレス: aah37430@pop06.odn.ne.jp

募集地域: 大阪市内
募集パート: Vo, G, B, D
自己のバンドがなくても組みたいんです。どんな曲をやるか話し合いで決めていって、何をやりたいかは書きませんのであなたの好きなアーティストの事を聞かせて下さい。ちなみに自分はステイブ・ヴァイが好きで24です。強いて言えば洋楽Hifiが好きで、曲が作れる方ならなおいいんですが、初心者でもかまいません。(自分もヴォーはほとんどできません)がんばりましょう。

代表者名: ゆき川
アドレス: angler@nasa.space.town.ne.jp
募集地域: 都内・神奈川
募集パート: D 加

多摩地区在住28歳、ゆきこです。シンフルでストレートなロックバンドに加入希望です。手を増やすよりリズムを刻んでグルーブをだしたいです。Rストーンズ、Bクローズ好き、男性Vo、日本語詩のバンドからの連絡待ちです。

代表者名: 石毛輝
アドレス: atama@satnet.or.jp
募集地域: 埼玉県(浦和)大宮 川口 上尾(周辺)
募集パート: B, D

当方GとVoです。今、高校生一年生です。浦和市に住んでいます。僕等のジャンルは何でもやります。が、主にはビジュアル系バンド、スカ、ミクスチャーがやりたいです。

以前のバンドを脱退したので当時はD、新たにバンドをやりたいになりました。基本的にはビジュアル系でちょっと化粧をやるバンド。音的にはデイル、ラサティーズ、マディスグレイルなギター系のほか、デザイア、クラインカイザー、マリスミセルなども聞きます。ギター以外の編曲、メロディ、作詞はできます。詩は退廃的なものやら色々です。

バンド名: カントリーフォー
アドレス: khei-yuki@tokai.or.jp
募集地域: 静岡県東中部及び神奈川県西部
募集パート: 女Vo, AG, et c コーラス、作詞家

フォークバラード系のオリジナルCDをリリースしました。バンドの形態はPPMスタイルにブルゲラスをミックスしています。最近ではデジタル楽器もとり入れていきます。メンバー全員社会人なのでコンサートよりもライブ中心になっています。商業ベースの考えはあまりありませんがTVマラソンのエンディングを作ったりFMに出る事もあります。

代表者名: 愛姫
アドレス: ehime@hanako.or.jp
募集地域: 横浜渋谷等
募集パート: 男Vo, G, B, D, K

ビジュアル系に近いのがやりたいです。Voはwiiでやりたいので男の方を募集。個人的な方募集。最終的には6人で活動したいと思っています。サウンドは色々なものをやっています。練習は、月1~2あたりを考えています。初心者可。始めはコピーそのうちオリジナルをやる。性格重視。あと自分のアピールできることを(以下)書いて下さい。

バンド名: SANSKARA
アドレス: CHYENNA@nolmail.com
募集地域: 吉祥寺
募集パート: B

オリジナルやっています。興味があったら連絡下さい。

代表者名: MIKOTO
アドレス: keio-rin@3rim.or.jp
募集地域: 東京
募集パート: G, B, D, K

東京で活動中の当方Vo。中後期ビートルズ、その他60、70好み。形にこだわらず、アクティブに新しいものを創ることを考えています。斬新で前衛的、POPでサイケで刺激的なOCCやりたいです。やわらか頭と遊び心のある人がいいです。歌詞は日本語で、「かっこいいこと」やりましょう！完全プロ指向、年齢・性別・国籍・楽器不問連絡待ち！

代表者名: CRAZY-KIN
アドレス: kinchan@orange.ocn.ne.jp
募集地域: 香川県近県
募集パート: G, D

香川県近県でG&Dを急募します。PUNK、HARDCOREの好きなあなたと一緒にハジケまじゅりLIVEがしたくてウズウズしているので至急、連絡ください！

代表者名: KEN
アドレス: In402@mail.goo.ne.jp
募集地域: 愛知県一東三河
募集パート: G, B, K

08年代エロバンドを作ろうと思ひ今回募集かけてます。ストーンズ、D・ボウイ、TOTO、E・クラフテン、VH他いろいろとやりたいと思っています。とにかく盛り上がり上げて楽しめるバンドをめざして、やや年齢入りますがやる気あればOKなので、豊橋のスタジオ入れるGBKまでメールを！

代表者名: yas
アドレス: granu@pc.highway.ne.jp
募集地域: 東京
募集パート: G

今回、正規メンバーのキタリストを募集します。活動地域は東京です。楽曲はhttp://home4.highway.ne.jp/~yastyle/の「Musuem」をクリックしていただけるので、応募できるページへいくことができます。気に入ってくださったキタリストの方がご応募しましたら、是非メールをください。

バンド名: アポロマニア
アドレス: deesing@aol.com
募集パート: Vo+K, K
募集地域: 東京

僕達はG+Vo、B、Dの3人です。活動場は下北沢、渋谷、吉祥寺、新宿GMAです。曲はオリジナルです練習はみんなで話合いです。好きならいいです。好きなミュージシャンはコステロ、ビートルズ、オーシーカンラーション、70年代ソウル、ニックロウ、山下達朗等です。今はノリがいいロックな曲とポップな曲の半分ずつ位です。バンドのフインキも良いしお客も良いはかりなので楽しくできると思います。

代表者名: Nonyuki
アドレス: anubis@strim.or.jp
募集地域: 茨城
募集パート: Vo, D

年齢不問/楽しく演れる人、やる気ある人、作詞出来る人、ノタクソ、初心者、かけもち、ヘルプ、当方、G(30)、G(26)、B(26)です。練習は水戸でやっています。ジャンルはROCK、J-POPを中心に、HARD、妖しい、バラード(あまりやらないかな...)等々なんでも、気に入った音楽を幅広く演りたい。オリジナル、コピー両方。まずはお気軽にメール下さい。詳細はそれから。

代表者名: Kotaro
アドレス: deisig@anet.ne.jp
募集地域: 都内近郊
募集パート: 女Vo

女性Vo募集します。なるべく音域の広い方で、歌詞が書けると尚可。都内・都内近郊。J-pop系オリジナル&カバー。詳細はメールにて。

代表者名: RASEN
アドレス: shimada@jeet.co.jp
募集地域: 東京都
募集パート: 女Vo, G, D, K

相川七瀬や、椎名林檎みたいなGirls Rockを中心に洋・邦問わずRockをやりたいと思っています。経験や腕よりもやる気・性格重視です。活動場所は集積で、月に一回、第一四土曜にやりたいと思っています。音楽を楽しみたい、そんな人を探しています。

バンド名: 市井 BREAST STROKES (照井)
アドレス: k-k-ken@n-net.ne.jp
募集地域: 東京都中央線沿線三多摩地区
募集パート: G, D

ミッシェル、スーパーカー、レディオヘッド、等好き、14才男でBとGVの初心者、オリジナルもやりたい。ジャンルはパンクロックだが、あまりとらわれず。結構プロ思考。年齢経験性別問わず。とりあえずメールください。

バンド名: Dumb Notetatum(ノート)
アドレス: mconcept@mb.infoweb.ne.jp
募集地域: 大阪府
募集パート: 女Vo, et c 女コーラス

ソウル&ファンク系オリジナル中心。毎週木曜日晩大阪市内まで練習される方。現在ストリート活動中ですが、Vo決まり次第レコーディングします。初心者不可、やる気のある人に限る、年令不問。当方音楽器・Petc含む8人編成。

代表者名: Ais
アドレス: ais@music.design.co.jp
募集地域: 東京近郊
募集パート: B, D, K, et c (トランス)

現在Vo(女)G(男)のユニット形式の活動を開始したばかりの2人です。「ライブ活動も行う予定につき、他パートを募集しています。現在は打ち込みでデモを作成中です。16Barで聴いて心地よい音楽を目指しています。なお、キーボードは打ち込み技術に精通している人を希望します。当方、年齢、容姿よりも音楽性、性格重視です。お気軽に連絡ください。よろしく！

バンド名: Sun-gate-Studio
アドレス: 09941073@ynu.ac.jp
募集地域: 横浜近郊
募集パート: D

10月20日をもって脱退の為、急募します。メンバーはVo(女)G(男)B(男)です。現在の活動は主に横浜です。詳細はURLにお問い合わせください。腕に少しでも自信のある方、少しでも興味のある方は連絡してください。10月9、20日のライブにきてください。

代表者名: Tea Time
アドレス: kana-t@posto
募集地域: 愛知県
募集パート: 女K

私(25歳女)は自分で作った歌(詞とメロディのみですが)をどなたかに伴奏をつけて頂き、それを一緒に歌ってライブのために、演奏の場を募集してやりたいです。バンドではなく音楽をやる仲間という考えなので、ピアノが弾けるのに活動の場がない方など、是非一緒に活動しませんか？

代表者名: TSUKASA
アドレス: onimaru@pop21.odn.ne.jp
募集地域: 愛知県(高津)津島
募集パート: Vo, G, B

Voは女性希望。年齢は19歳から25歳くらいまでがベスト。ある程度できる方。ハードロック、メタルをしていきたい。よろしくお願ひします。

代表者名: 〇Pキ
アドレス: hidetasi@mediawars.ne.jp
募集地域: 滋賀・京都
募集パート: B

社会人バンドです。現在は、Vo(26)G1(28)G(25)Dr(26)DRUMのメンバーをやっています。オリジナルもやり始めています。中級以上、やる気のある方、男女問いませんがお気軽に連絡ください。

代表者名: masu
アドレス: ms-tamura@n3justr.net.jp
募集地域: 大阪
募集パート: B 加

26男なんでも弾きます！弾きこなします！楽譜も読めます！音楽スクールで高校一年の時から通い8年間Bを触っています。一通りなんでも出来るつもりです。楽器はYAMAHA GBB、キーン、MOONを持っておりバンドはYAMAHA405VRを持っています。先日私が所属していたバンドが解散したので現在活動できるバンドを探しています。ぜひBをお探しの方が居ましたら仲間に入れてやって下さいませ！

バンド名: PC33
アドレス: satohk@seicho.co.jp
募集地域: 埼玉及び近郊
募集パート: G, K, et c (by et c (サクソ管)

GRP系のLAFエージョンです。リットンズ、フォーレイ等にインスピレーション。趣味ですが、真剣に取り組みます。オリジナル&カバー。キャリア、年齢など不問。デモテープありますので、気軽に連絡ください。

代表者名: Demos
アドレス: penos@yahoo.co.jp
募集地域: 東京都内
募集パート: G, B, D, K

当方V、Gの24男です。自身で作詞作曲しています。ジャンルはソフトロック、ネオアンパンク、ブルースなどをベースにしたポップロックです。プロ指向です。中級以上のライブ経験者、アイデア、知識の豊富な方連絡お待ちしています。

名前: MOZ
アドレス: mozuku@sun-net.or.jp
募集地域: 大阪
募集パート: Vo, G

Xが歌えるVo、hideが好きなGを探しています。やる気重視年内にライブすることができ決まっています。ライブ経験があっても度胸があっても、客を泣かせられる自信のある人。初心者はちょっとムリかな。練習は梅田付近で、とにかく連絡待ちです。

代表者名: おがた (Lifehouse)
アドレス: n-gata@pop17.odn.ne.jp

Independent Works

今号の掲載作品

感想文[reader@r7.1r.net] <

小説

「夢仕掛けのサラタボール」

マキロン

「一輪の花束」

ロビンソン

wbs50956@mail.wbs.ne.jp

「Over The Horizon」

R7 project

http://r7.1r.net/R7/

プロを目指して活動している方やインディーズの方々の作品を紹介していくのが、この「Independent Works」です。お待ちしております。

「より多くの方向」 小説・コミック・音楽・イラスト・映像など様々なジャンルの作品を知って欲しい。「制作している

方々についても知って欲しい。」そんな願いで、このコーナーを制作しています。

作品の感想や制作者への応援などのメッセージを募集しております。メッセージは、E-mailで直接制作者アドレスに掲載している場合のみが

読者係[reader@r7.1r.net]までご連絡ください。また、作品購入に関する情報は、関連ページ「wing」で紹介されている場合がありますので、こちらを参照してください。

関連ページ「wing」

http://r7.1r.net/wing/

今号の掲載作品

感想文[reader@r7.1r.net] <

小説

「夢仕掛けのサラタボール」

マキロン

「一輪の花束」

ロビンソン

wbs50956@mail.wbs.ne.jp

「Over The Horizon」

R7 project

http://r7.1r.net/R7/

掲載作品に関する注意

ここに掲載されている作品の著作権などの全ての権利は、制作者にあります。いかなる場合でも、一部または全部を無断で転載または複製することは禁止いたします。権利を侵害する行為を発見した場合は、法的手段に訴える場合があります。転載に関するご相談などは、メディアアグルーヴ編集室[edit@r7.1r.net]までお問い合わせください。

達が、夢の中に住んでいる。何故夢の中に住んでいるかって？原因は、人間の追いつけな「夢」にある。つい百年ほど昔、人間達はこんなでもないものを作った。

「他人に夢を見させる装置」だ。

俺のいる三十一世紀では、科学技術が極度に発達している。およそ千年もの昔、つまり十一世紀頃、人間はどうしたことか、革命的な科学技術を次々に発明してみせた。それが積み上げられた結果、人間は自分達の先祖の代から続いていたいろんな問題を、解決し始めた。

それに喜んだ人間達は、さらに文明を発達させていき、様々な環境問題や、世界的な人口の増大とか、それに伴う食糧不足とか、か、資源の問題、そういったものさえも科学の力によってねじ伏せてしまった。結果として、地球上にいる人間達の数は膨れ上がった。

さすがに人間の数が多すぎるといので、人間達は宇宙へと飛び出した。大昔の話だ。このあたりは、俺が通っている高校の歴史の教科書を見れば、詳しく書いてある。見たくもないけれど。

人間は心配の種が無くなれば、むくむくと欲望が湧いてくる。今

俺の名前はマオとっつ。夢の中の俺の名前は。

本当の名前はどつだっつ。俺が住んでいるのは夢の中なので。

俺の周りを、人が歩いている。何一つ不思議なものなど無い日常の世界。犬を散歩に連れていく人。公園で遊んでいる子供達。楽しそうに歩いているカップル。すべて、夢。幻だ。

今は三十一世紀。本当の歴史の上での。俺が生まれた時には、もう人間は宇宙全体に広がっていた。でも俺がいるのは地球だ。

そんなことだっつてどつでもいい。なぜなら、俺が住んでいるのは夢の中だから。

時々、自分でもわけが分からなくなる。一体本当の自分は何なんだ。夢こそが本当の世界じゃないのか。そついつ風だ。

俺が見ている夢。ただし、俺の脳みそが作っている夢じゃない。他人に「見せられている」夢だ。

気味が悪いだろっつって、実は気持ちよくてたまらないのさ。俺だけじゃない。他にも大勢の人間

までには出来なかったことへの欲望、新しいモノへの欲望、あるいは快樂への欲望。そんな「夢」を追い求めて、さらに文明は進んだ。

いつの時代でも、人間は何かを求めている。服やアクセサリー、テレビ、車、家、財産、かわいいカノジョ、カッコいいカレシ、愛したい子供、名誉、自信、追いかける目標、夢。そういったものが人間達を突き動かしてきたんだ。

だが、すべてを手に入れることができるわけじゃない。家庭を持つてささやかな幸せを手に入れても、ばく大な財産はそう簡単には築けないし、逆にどんなに財産を持っていても、自分にとつての本当の幸せを掴み取れるとは限らない。そついつことは、よく聞くだろつ。そう簡単にはいかない、ということだ。

ところが、そついつものをすべて満たしてくれるような、あるモノが作られた。

それが「他人に夢を見させる装置」だ。

正確には、仮想現実体験装置。つまりバーチャル・リアリティの世界を体験できるという装置だ。

簡単に言ってしまったけれど、

実際これはメチャクチャにハマる。ハマらない人なんかいないっつ。今、僕はその「仮想現実」の世界にいる。けどはっきりに言っ

この世界は仮想でもなんでもないような気がする。現実そのものなんだ。足元の石を拾えばそのザラザラした感触があるし、歩いている人と話すこともできる。水に飛び込めば冷たいし、火に手を近づければ熱い。

さらに、人間達は生活を営んでいる。自宅は勿論、デパート、レストラン、書店、そついつたものが存在し、金の流通がある。道路には車が走り、電車も走っている。現実の社会となんら区別ない社会が形作られている。

仮想現実体験装置「ドリームワーク」と名付けられている。この装置、これを利用するための準備は、驚くほど簡単だ。

自分の脳をちょいとじじって、「ドリームワーク」の端末と自分の脳を繋ぐ。そして変な浴槽に入る。浴槽は、赤ん坊が浸かっている羊水のような液体で満たされていて、現実の世界では人々はそれに浸かる。体を保護するための。これに入っていれば、長い期間飲まず食わずでもいられる。

準備はこれだけ。あとは、仮想現実の世界が待っている。信じら

れないような体験が。

「ドリームワーク」は、世界中の人間達の生活を一変させてしまった。仮想現実にいる人間は、半分ほどは「ドリームワーク」の作ったプログラムだけで、残り半分は「ドリームワーク」によって作り出された仮想現実の世界を楽しむ。現実世界の人間達だ。確か、100億人ぐらいの人間が仮想現実の世界にいるらしい。

信じられないっでも、あれだ、インターネットと同じだよ。そんな呼び方はもう廃れているけど。

現実世界の地球の人口の半分に当たる数がある。つまり、ほとんどの人間はもう現実の世界がつまらなくなっただ。がんばったって思い通りにはならないし、金もない。仕事がつまらない。学校がつまらない。興味半分という人もいるけれど、大抵の人は本気で仮想現実世界で生きている。

信じられない、夢のような世界だ。例えば、物を食べれば味を感じ、お腹は満たされる。「ドリームワーク」が味と満腹感を脳にダウンロードしてくれる。

仮想現実の世界で麻薬を打つても、禁断症状みたいなものが現れることはない。気持ちがいいという部分だけ「ドリームワーク」が自分の脳へダウンロードしてくれる。

ないより、楽しい方がいいに決まってる。人生が充実しているとかしてないとかなんて、自分の脳みそが感じることだ。だったら、仮想現実の中で生きるとはとても有意義なんじゃないのか？この夢のような世界でさ。実際、

夢みたいな世界なんだけど……。考えるところながらから、余計なことは考えない。好きにやったりやいいのさ。この世界じゃ。

映画を見終わって、僕は外に出た。噴水が見える。町の広場だ。ヨーロッパ風の、石畳の道が続いている。

こんにちはマオ、と通りかかった近所のはあさんが言ったけれど、僕は返事をしなかった。何故か？

そのばあさんはプログラムだからだ。もちろん本物と見分けはつかないけど、感情なんて無いに等しい。笑っているけど、それはプログラムされた笑いだ。心で思っただ笑っているんじゃない。プログラムと本物の人間ももちろん、その姿はドリームワークが作り出したものだけ（を区別するには、特別何かが必要なわけじゃない。普通にしている）、ドリームワーク」が勝手に分かせてせている。

自分の好きなようにイメージすることが出来る世界だ。車と同じ速さで走れたり、水を飲むとオレンジ・ジュースの味がしたり。とにかく、何でもありの世界。ただ、あまりにも行き過ぎると「ドリームワーク」が警告してきて、ひどいと強制的に現実世界に引き戻される。そして一生、仮想現実の世界を体験することを禁じられてしまう。

そうならないためだけに、人間達は自制しているようなものなんだ。仮想現実世界では。

一部の現実世界の人々は、「ドリームワーク」で仮想現実を体験するのをやめろ、と言っているけれど、はつきりいつて馬の耳にネンブツってやつだ。誰も聞いてやらない。

僕は日本の東京で生まれたんだけど、周りの高校生なんか、みんなやってる。仮想現実の世界に入ってしまうえば、誰に物を言われることもないしね。学校だって行かなくていい。勉強は？「ドリームワーク」が、いくらでも知識を自分へ送ってくれる。どんな難しい数学の問題だって、一発で解けるよ。

じゃあ、現実世界に戻ったときに、人間はどうなっていると思っ？

目が見えない。耳が聞こえない。僕は、隣の家の玄関の前まで歩いた。

スピッツ犬がいる。オスなのかメスなのかは分からない。けたたしく吠える種類の犬だけど、この家の犬が鳴くのを一回も聞いたことがない。

しゃがみ込んで、頭を撫でてやる。それでも尻尾を振るわけでもない、ただぼーっとしているだけだ。

問題なのは、この犬がプログラムではないってことだ。つまり、人間が犬になってる。そういうことも出来るんだけど、そんな物好きはなかなかいない。

そのとき、犬が喋った。物好きだと思ってる？と。僕は、うん、と正直に言った。日本人だろうか。いいよ、私だって最近はずいぶん嫌になっってきたの、と犬が言った。どうやら女の人のようだった。日本人？と聞くと、日本の高校生、と答えが返ってきた。なんだ、いっしょだな。なんで犬になってるの、と聞く。本当は自分でもわけが分からなくなってる、とカノジョ。なんで夢の中に入ったの？学校が嫌になったからよ。散々けなされて、嫌になったの。僕も同じだよ、ていつか、もう現実の世界そのものが嫌。

い。全身の筋肉は弱りきって、自分で体を動かせない。記憶が薄れている。ひどければ戻った途端に死ぬ。こんな感じだ。夢が覚めてすぐに死んじゃうのさ。長い期間仮想現実世界にいた人ほど、そうなる。

それを考えると恐ろしくて、少しでもだけ体験して辞める人はたくさんいるんだけど、やっぱりまた「ドリームワーク」の世話になる人があとを絶たない。目が覚めたときに、「ドリームワーク」での記憶は全部無くなっているけれど、それでもだ。

僕が仮想現実世界にいる理由は……学校が嫌になったからだ。いじめられたし、勉強も運動もできない。親は、絶対に「ドリームワーク」に繋がっちゃいけない、人生がめちゃくちゃになる、そんなことを言ってたけど、じゃあ仮想現実で人生をまっとうすればいいじゃないか。幸せな人生を。別に誰かに迷惑をかけるわけじゃないんだから……。

そんなことを考えながら、仮想現実の中で目が覚めた。朝だ。いい朝！

僕、つまりマオは、普通の家庭で暮らしている。家族は日本人の顔だけど、親父の自身はアメリカの黒人。おふくろはプログラム

私も。でも、やっぱりちょっと怖い気もする。何が？この世界が。怖いなら吠えまくればいいじゃん。スツキリするんじゃない？別に誰が何を言うわけでもないし。吠えるのは嫌なの。

なんで？どんなに吠えたって、結局は飼われているでしょ、だから嫌なのよ。じゃあなんで犬なんかになっているの？そっちの方が、わけわからないよ。人間じゃない視点で世界が見たかったから……。神様みたいになれると思っただから。

神様ってのは無理だろう、と思っただ。さすがに「ドリームワーク」でも神様になるっていう願いは叶えてくれない。強いて言えば、「ドリームワーク」が神様だ。犬なんかで、神様になんかなれるわけないよ。だって、神様はいつも上から見下してるだろ。僕が通ってた高校の教師みたいにさ。犬は違う。人間よりも下から見上げるだけだ。それよりも、鳥とかになっただ方がいいんじゃないかな。実際、多いんだ。鳥になっ

別にこんなところになくてもいいんだけど、家にいた方が落ち着くからだ。

親父は本当はまだ13歳らしい。僕より年下だ。そいつが45歳のオッサンになりすましてる。いつも物好きだなアと思っ。

それぞれが役を演じてるようなもんだけれど、そんなことは気にならない。ロールプレイング・ゲームの感覚に似てるかな。

親父は英語で喋っているけど、「ドリームワーク」が言葉を無意識のうちに解釈させてくれてるから、普通に自分のペースで喋れば相手に通じてる。言葉の壁なんか無い。

朝飯を食ったあと、僕は自分の部屋に入って、映画を見ていた。スクリーンなんかいらさない。眼を閉じて想像すれば、途方もなく大きな画面が現れて、好きな映画を見ることが出来る。中には、仮想現実の中で住んでる人達がプログラムした映画もあるんだ。そういうことだってできる。簡単に。現実じゃこうはいかないけどね。でもこの夢の世界でなら、どんなことだって出来る。

僕は、もう現実には戻るつもりはない。現実なんかどうでもいいんだ。こっこの世界の方が、生き甲斐がある。そんな気がする。だって、そうじゃない？楽しく

達が。僕が言っても、カノジョはやっぱり、犬の方がいいと言った。下から見上げる方がいいと言ったんだ。そこまで話したら、もうカノジョは何も言わなくなった。僕は、またね、と言って家に帰った。

神様になりたいと言っていて、犬になりすましてる。どいつのことだろう？僕には、分からなかった。

この世界の神様は、知恵の実をいくらでも食べさせてくれる。腹一杯になるくらいに。しかも、みんなに平等に分け与えてくれる。犬にだって……。でもカノジョは、せつかくの知恵の実をひとつも食べようとはしていないかった。

そのことを家で話した。13歳の親父はこう言う。マオ、僕が大人になってるのにも理由があるよ。子供のときに言つとバカにされるようなことでも、大人が言つとみんな納得するんだ。だから僕は大人になりたかったんだ、早く。

前に親父はこうも言っていた。黒人だからって、未だに差別するやつはいるんだ、1000年も前から黒人を見る目は何も変わっちゃいないんだ。生まれたところや皮膚や目の色で一体僕の何が分かるんだ……。

仮想現実では、相手が現実にはどんな人間なのかなんて、聞いてみなければ分からない。普通の人間なのか、犯罪者なのか、そんなことだって分かるはずもない。みんな、一度は必ず相手を疑う。疑わないと、お互いに心の垣根が越えられない。そういう世界だ。握手をしたときの温もりや手の感触も、「ドリームワーク」が作り出す幻ではない。

すべてが夢の中。幻の世界だ。それでも僕は……逃げたかったんだ。なんだか自分が分からなくなってきた。現実の自分と仮想現実の自分。夢を見ている自分は、夢の中の自分で、ものを考えてる……そしていくら考えたって、目覚めたときには何もかも忘れ去っている。

でも、この作られた夢が無意識のうちに見る夢と違うところがある。自分で起きるタイミングを凶れるってことだ。そして、目覚めたときには「起きよう」と思って目覚めたことは忘れてる。だから、本当に夢だったのだと思えるらしい。

僕は自分で自分の夢を演出しているってことになる。スタッフロールには、100億人のクレジットが流れる可能性があるんだ。そして僕が他人のスタッフロールの中からないんだ。僕は、何も言えなかった。自分が戻るか戻らないかを考えているときに、他人のことにまで手が回らなかった。「ドリームワーク」に、親父のおぶくるを生き返らせてくれ、と言っても、反応はない。だってそれは現実の世界で起こったことなのだから。リセットはきかない。

そう。現実の世界でリセットはきかない。リセットのきかない世界で死ぬということは、本当に存在が無くなってしまふということだ。現実の世界でも仮想現実の世界でもない、どこか遠くの世界へと旅立ってしまったことだ。考えたとしても恐ろしくなってきた。戻ればそこはリセットがきかない世界。だが今の世界にとどまっていれば、いくらでもやり直しがきく。

でも、一生、人を疑い続ける世界なのかもしれない。それは現実の世界でも同じことか？いや、違うのかも知れない。現実なら生きていくうちに、いつか本当に自分のことを好きだと言ってくれる人が現れるかもしれない。仮想現実が吐き出す虚言じゃなく、温かみのある心からの言葉だ。

戻るか。戻ってそれを確かめてみたい。戻ったときには、今思ったこと

に混じっていることだってあり得る。エキストラとして、あるいは主演の一人として。

疲れたので眠りに就く。仮想現実の中で眠るのは、奇妙な感じがする。夢は見られるのだろうか。自分が住んでいる世界が夢なのに、その中でさらに夢を見る……。

犬になりすまして神様になる、ということが分からない。どういうことなんだろう。上から見下すのではなく、下から見上げる神様。教師なら嫌だけど、神様になりたいんなら、そんなことで本当に満足なのか。僕だって人のことは言えないかもしれないけどさ。毎日ただぼんやりと過ごしているだけなんだから。それが楽だから……。

決して吠えない神様。何一つしよつとしない神様。……そうか、犬のスペルはdogだ。逆さにすると、神様になる。そんな簡単なわけないか。

目覚めたのは夜更けだった。僕はどつしても気になり、外へ出て隣の家へと歩いた。スピッツ犬のカノジョは、眠るわけでもなく、じつと空を見つめている。吠えることなく、尻尾を振ることなく。寂しくない？と聞くと、すこく

は忘れてる。でも、自分が今持つた気持ちは、現実でも見つけられると思う。それだけは嘘じゃないと思うから。起き上がったら、多分僕は何故戻ったのかを考えるだろう。そして仮想現実での僕。マオと同じことを思えたら、そのときは現実でうまく生きていけるような気がする。

親父が泣いていた。僕は、戻れよ、僕も戻ることにしたから、と親父に言った。親父は頷いた。それがお別れだった。僕は戻る。現実の世界へ。このバカ、という声が聞こえる。お前なんか、いてもいなくても同じ、という声が聞こえる。金を出せ、という声が聞こえる。みんな僕をいじめていた連中の言ったことだ。

スピッツ犬のカノジョのところへ戻る。抱き上げて、とカノジョが言う。現実だったらどんなに素晴らしいことか、と思いつつ、僕はカノジョを抱き上げる。一緒に戻らない？うん。今、決めた。僕も戻ることにする。現実の世界へ。

じゃあ、このままずっと抱き締めていてね、現実に戻ったら何も

寂しい、と。

でも、現実に戻れば同じことでしょ、ここでの思い出は全部無くなって、現実の思い出がまた再開してしまふ。もう辛い目には遭いたくないの、現実の世界の辛さに比べれば、この世界の寂しさなんて全然平気、それよりも、犬になつていると結構面白いのよ、世界が全然違って見えるんだから。カノジョは仮想現実の中に逃げている。しかし僕は人のこと言えない。それなのに、親にはどう言ったの、と聞いた。

私は家を出てきたの、学校に行くのは嫌だったのに、父さんも母さんも行けつて言うから、逃げて来ちゃった。おはあちゃんことは心配だけで。とカノジョ。その次に僕は、戻る気は無いの？と聞いた。

もしかしたら自分にも問いかけていたかもしれない。少し迷っている。実は。カノジョは、黙ったまま。一体僕は、どつしたいんだろう。どつしてもカノジョの本音が聞いてみたい。カノジョに恋でもしたのだろうか。犬に恋をしたのだろうか。いや、カノジョは犬じゃない。頭がこんがらがる。不意に、本当は戻りたいのかも知れない、とカノジョが言った。

かも忘れてしまつけど、もしかしたら現実でもそんなに遠くないところにいるんじゃないかって何となく思つたの、現実でも会えて、友達になれるといいね。いや、もしも偶然会えて、知り合えたら……。知り合えたら……。そこから先は、現実で会えたときに言つよ。

俺は眠っていたのか、目が覚めた。ヌルヌルした変な液体の中だ。勢いよく上体を起こそうとするけれど、力が入らない。目が見えない。心臓の鼓動みたいなものしか聞こえない。赤ん坊になつたみたいだ。なんとか周りをまきぐつて、手をすりやめて起き上がる。目の前にぼんやりと光が見える。俺は何故眠っていたんだろう。そうか、「ドリームワーク」に繋がっていたんだ。

でも何故切れたのだろう。気持ちよかつたのに。「ドリームワーク」の注意書きにはこうある。「自分が現実に戻ってきた際には、必ず何か理由がある」

目が少しずつ見えてきた。周りには無数の浴槽が見える。その中にいるのはすべて、「ドリームワーク」に繋がれた人々だ。隣の浴槽を見る。女の子がひと

それを聞いてますます迷ってしまった。声音がとても寂しそうだったから。

戻ればまたいじめられるんじゃないの？それでもいいの？

怖いけど、やっぱり現実の世界で生きていきたい。こつちの世界にいたら、何を信じればいいのか分からなくなつてきたの、でも一つだけこの世界が私に分からせてくれたことは、私は私だということ。誰でもない、私という人間だつていうこと。神様にももつたりたくなかつたわ。逃げるのもつやめようと思つた。

唐突にカノジョは、現実の世界に戻るといふようなことを言い出した。十分そつ思えるような言葉だつた。あなたはどつするの、と逆に聞かれた。立場が逆転した。僕は……。

家に戻ると、親父が悲しそうな顔をしていた。どつしたんだ、と僕は聞く。夢の中の親に向かつて。13歳の親父は言つた。マオ、さっき「ドリームワーク」が知らせてくれたんだ、現実の世界で僕を飛び出したつきりですつと帰っていないんだ、今すぐにでも帰りたいけれど、現実に戻るのがすこく怖いんだ、どつしたらいいか分かる

り、起き上がっている。偶然一緒に目が覚めたのか。俺もその子も、震えている。どこかで会つたような気がする。デジャ・ヴというやつか。

カノジョは弱々しく微笑んで、「こんにちは」と言つた。俺はガリガリの手でカノジョのガリガリ

友人を私の家へ招くと、それが初めての訪問である場合、彼女たちは必ず私の部屋の前で足を止める。そして次に大抵同じような言葉をお互いにする。

「彩って二つという趣味だった？」
驚くのも無理はないだろう。時に客観的に自分の部屋を眺めてみると、私自身驚くのだから。

当然この部屋にあるぬいぐるみの多さに。しかもすべてがウサギのぬいぐるみ。これはそうそう見かける光景ではない。いい加減にしておかないと、そのうちベッドの上で寝ることも出来なくなってしまうし、見かけるとつい手が伸びてしまふのだから仕方ない。親しい友人の間では、既に私の誕生日にはウサギのぬいぐるみを贈ることが定番となっていて、たとえ何もなくても毎年数体のぬいぐるみが増えていく寸法である。

なぜ私がウサギのぬいぐるみコレクターもどきのようになってしまったのか。

これを説明するためには、私が小学生だった頃まで時間を戻さなければならぬ。だが、私が飼育小屋の様子を見られるように頼んだ友達は、その動物に非常に愛着があり、ほとんど毎日掃除をしなおしたり、えさを入れ替えてくれていたということだった。考えてみれば、私が一番で行った日も飼育小屋はかなりきれいに掃除されていて、あまりすることがなかったことを覚えている。今思うとそれも彼女のおかげだったということになる。シヨックだっただろうということ。は簡単に想像できる。電話をしてきた彼女の声は震えていた。

「彩、どうしよう。シルバーが動かない。」
家でのんびりテレビを見ていた私は、その瞬間に体が緊張するのを感じていた。

「麻衣子、今家だよ？ すぐ行くから待って。」
「わかった。」
彼女の答えを聞くか聞かないかのうちに私は受話器を置き、自転車で飛び乗っていた。出せる限りのスピードを出して彼女の家まで自転車をこぎながら、私はシルバーの姿を思い出していた。名前のとおり、銀色の毛をしたかわいいうさぎだった。耳のたれたウサギが新しく増えていっていたが、シルバーはその前からいる耳のたつたウサギだった。いつからいたのかは記憶にないが、シルバー

くはならない。信じる信じないはお任せするが、少なくとも私はそれが本当にあったことだと信じているし、またこの先も信じ続けるつもりである。

それは私が小学四年生だった頃の話。今から十五年以上前の話になる。

私はどこにでもあるような公立の小学校に通っていた。校舎は古く、遊具はあまり目立つたものではなかったが、クチナシやキンモクセイの植わる狭くとも心地よい中庭があった。そうでなくてもそこではそこかしこに木々が木陰を作り、池では悠々と鯉が泳いでいた。そしてその学校にはやはり飼育小屋があり、鶏とウサギを飼っていた。飼育を担当するのは四年生と決まっておき、低学年の生徒たちはそれを羨ましそうに眺めていた。どこの学校でもそうだとはいえ、その学校でも飼育小屋というのには特に人気のある場所だった。私もよく昼休みや放課後に、あるいは休日にもそこを訪れては、友達と一緒にえさをあげたものだった。そうして四年生になるのを心待ちにしていた。

私は四年に進級し、三組になった。その学校は生徒数が少なく、どの学年も基本的には三学級で編成されていた。私たちよりも一つ上の学年は三学級作るだけの生徒だけが馴染みのあるウサギだったことは確かだと思ふ。その他のウサギは前年にきたものばかりだった。シルバーだけが幼い頃の私たちを知っているウサギだった。

「彩、
「ごめんね、遅くなって。学校行くよ。」

彼女はうなずくだけで他には何も言わなかった。目には涙がたまっていて、必死でこらえているのがすぐにわかった。それを見た私も思わず泣きそうになったが、そこでは私がしっかりするしかなかった。とにかくシルバーを見るまでは泣いてはいけないという気がしていた。

沈黙がすべてを説明していた。眠ったまま動かないシルバーを抱きながら、私たちは静かに泣いた。しゃくりあげる音だけがいつもと違うことを辺りに教えていた。

なんでもっと見ていてあげなかつたらんたろう。
なんでもっとかわいがってあげなかつたらんたろう。
なんで……。

「彩のせいじゃないよ。」
私の心を見ぬいたように彼女は言った。

「誰かのせいにしたらシルバーがかわいそうだよ。」
「でも……。」

数がなく、二つのクラスしかなかった程である。

飼育当番は一組から回すことになっていった。六人組の生活班が1週間ごとに受け持ち、六週間での次のクラスに回す形をとることになった。したがって三組がそれを受け持ったのは一学期が終わるうとして七月から。学年全体がそろそろ飼育小屋に対して興味を失いつつある頃だった。人間とは手に入らないものほど欲しがるのであり、手に入ったらそれはたいた意味を持たなくなってしまうということが少なからずある。

小学生にもそれはみられる。いや、小学生だからなおさらはつきりとそれを表したのだと思ふ。学期の初めの頃は、自分が当番ではなくても喜んで世話をしたものが、だんだんと飼育小屋には当番の生徒だけが向かうようになり、昼休みや放課後に遊べない飼育当番を生徒は面倒だと思ふようになっていった。私はそうではなかった、などと嘘をつく気はなかった。私もやはり、進んで世話をしに行くような積極性は徐々に薄れていった。しかし私はその頃から人より責任感が強かった。十分に仕事ができていることを指摘されるのが怖かっただけかもしれないが、とにかく私は学級委員である手前もあり、自分が当番で

「麻衣ちゃんが正しい。」
私の言葉を別の声がささぎった。聞いたことのない声だった。

振りかえるとそこにはシルバーを抱えた子供が立っていた。普通の子供ではない。よくはわからなかったが何か違っていた。隣にいた麻衣子はギョッとした顔をしていた。

「逃げないで。」
その子供は慌ててそう言った。

「逃げるよ……」
麻衣子もすぐにそう言い返した。それでも逃げるのが出来なかったのは腕の中にシルバーがいたからだ。その頃になってようやく私にも何かおかしいのかわかった。その子供の後ろにあるものが、ぼんやりとだが見えるのだ。つまり、半分透き通っている、霧のようなものだった。しかし逃げだそうにも彼女を置いていくわけにはいかず、それはあまりにもシルバーに失礼なことだとも思ひ、私は凍りつくようにその場にいるしかなかった。

「僕はシルバーを天国に連れていかなきゃならないんだよ。でもシルバーがどうしても君たちにお礼を言いたいって言うからこうして出てきたんだ。本当は規則違反なんだからね、人間の前に現れるのは。」

私はなおもぞつとしたままだっ

ない日も放課後はそこを訪れ仕事が完了しているかどうか確かめていた。ただしそれは義務感からであり、そこにいる動物たちへの愛情からではなかったことを断っておかなければならないだろう。実際私は掃除が終わっているか、えさがきちんとえさ箱に入っているか、といったことしか確認していなかった。そのことが私をひどく後悔させることになるということに、初めのうちはまったく気付いていなかった。むしろ自分ではよく働いていると思っていた。夏休みのあの日までは。

私の家は学校から遠いわけではなかったが、それでも小学生の感覚では近いとは言えない距離にあった。あの暑さの中毎日学校に通うのは容易なことではなく、私は家が学校のすぐそばにある仲の良かった友達に、夏休み中気が向いたときにも様子を見に行ってくれるように頼むことにした。その友達は快くその頼みを引き受けてくれ、何かあったら連絡をくれるということになった。もちろん、夏休み中も当番を決めて毎日誰かしらそこに行くことにはなっていたが、監視の目がない夏休みは普段のように真面目に仕事をする生徒だけではないだろうということ、私はなんとなくわかってきたのだと思ふ。後から聞いた話だが、麻衣子はそうではなかった。

「なんて言ったの？」

信じがたいというのは声に表れていたが、それでも聞かずにはいられないといった様子だった。麻衣子の言葉で私も少し冷静さを取り戻した。

「今までありがとうって。二人に会えて幸せだった。二人のと、大好きだった。よく遊びに来てくれたよね。すごく嬉しかったよ。愛してくれてありがとうって。」

それだけ言うと、その子供はすーっと消えてしまった。今度は私も彼女も驚かなかった。いつのまにか涙は乾き、明るい顔になっていた。

「お夢、作ってあげようか。」
私はそう言い、麻衣子はうなずいた。

私たちは一輪ずつそこに花を添え、毎日シルバーのところに行くことを誓った。一日二本ずつの花を、シルバーは受け取ってくれていただろうか。きっと天国では枯れることなく咲き続けていることだろう。今では抱えきれないほどの花束となって。

それから私は、ウサギのぬいぐるみを見るたびにシルバーを思い出し、懐かしく手に取るようになった。今でもあの日に二人で

しかけてきた。

引き締まった肉体をしたいかにも水夫といった男だ。

「船に乗るんだよ。お金ならちゃんとする。それとも子供だけだどだねの？」

アロンは不機嫌に答えた。

「いや、そんな事はないんだがね。この船は大陸の港ヴォワワージュに行くんだぞ。子供が一人行くところじゃないだろう」

「そつかもしれないけど、俺子供なんかじゃないよ」

水夫はアロンのかっこうをまじまじと見つめてから言った。

「俺には十分子供に見えるがね。あのな、間違ってたなら謝るけど……君、もしかして家出かい？」

アロンは答えなかった。

そんなアロンを見て、水夫は笑いながら頭をかいた。

「別に家に送り返そつって訳じゃないよ。心配するな。いやね君を見てると昔の自分を思い出しちゃってね。まあいいさ。金さえ払ってくれば、大陸までは送ってやるよ。俺の名はラベル。何かあったら、何でも相談しに来いよ。さあ、乗りな」

ラベルはアロンを船の中に引き入れた。

その時、ラベルの後ろの方から太い声が出た。

「おい、ラベル。なんだあ、その

ガキは」

ラベルが口の中で小さく「げ、まずい」と言うのが聞こえた。

太い声の男が近づいてくる。

「せ、船長。ここの子は……」

ラベルが情ない声をあげる。

「その、家出してきたらしいんです。大陸に渡りたかって……」

ラベルを無視して船長がアロンを見下ろす。

大海の女神号の船長はたくましい体つきの中年の男だった。

顔に刻まれた幾つもの古傷がこの男の海での経験の多さを示していた。

だがその分、海の上での自尊心も高いのだろう。

「俺は家出なんかする軟弱なやつは嫌いだ」

静かな口調だったが、その低い声には人をひるませる迫力があつた。

せつかく長い間準備してきたのだ。こんなところでこれからの冒険を諦めてしまおうわけにはいかない。

アロンは負けじと船長を睨み返した。

「家出するのが軟弱なんてことはないでしょ」

「いや、軟弱だな」

しばらく睨み合つ二人。

船長はアロンの瞳を見つめたまま、「迷惑はかけんじゃねえぞ」と

言い残して出航の準備に戻った。

気に食わない様子ではあったが、どつやら乗船は認めてくれたようだ。

ラベルが肩をすくめてみせる。

「この船ではあの人には逆らえないってことさ。気をつけな」

アロンは船長のうしろ姿に礼を言い、ラベルに持金をわたして船に乗りこんだ。

間もなくして朝日が昇りはじめ、船は帆に日の光りを受けて西に向かつて進みはじめた。

「ふう。出航してみたんだな」

アロンは自分に割り当てられた部屋の粗末なベットの上に身を投げ出した。

ここまではなんとか順調にきたが、大陸に渡つたてからはどうすればいいのだろう。

世界の終端に行くにしても、いったいどっちに向かつたらいいのだろう。

アロンは幼い頃、フラットじいさんに何度も世界の終端にまつわるおとぎ話をしてもらったが、どの話にも世界の終端の具体的な位置は語られていなかった。

「太陽は西に沈むんだ。西に行けばきつと何かがあるぞ」

アロンはそつつぶやくと、枕に顔をうずめた。

フラットじいさんの悲しそうな顔が、急に脳裏に浮かんだので

あつた。

Media Grove

Editor in Chief : 相沢 裕貴

Writer & Editor : 青羊 鈴江 成美

Contributer : 長月 昴平
マキロン
日下シオン

Other Stuff : You

Published By

URL : <http://r7.1r.net/MG/>

E-mail : mg@r7.1r.net

本誌掲載の写真・イラストおよび記事の一部または全部の無断転載・翻訳などを禁止いたします。また、一部のみの再配布を禁じます。再配布は原本と同じ状態でのみ許可いたします。

相沢裕貴 (全般)私が創刊号で良かったんでしょうか?ご意見ご感想よろしくお願いします。また、創刊号からメールをいただきありがとうございます。スタッフにも感謝しています。

長月昴平 (24,25)オーバーザホライズン第1話連載中です。第1話は海洋冒険モノになっています。請つご期待。

マキロン (17,21):小説書いてみました。いかがでしたでしょうか。自分では結構、気に入つ

Voice of Staff

いよいよ創刊号の発行です。準備号から一ヶ月、多くの方からメールをいただきました。ありがとうございます。おかげなまで、創刊号からにぎわつことができました。では、今号の制作にかかわつたスタッフから一言(内は担当ページです)。

ています。なんだかマトリックすみただけど(笑)題名は故・スタンリー・キューブリックの「時計仕掛けのオレンジ」をもじってみました。

日下シオン (22,23):はじめまして、日下シオンです。書き始めてまだ日が浅いので至らない点多々あるとは思いますが、今後よろしく願います。テスト勉強もせずに小説を書く日々が続いていますが、これでいいのでしょうか。誰か私に数学を教えてください。(いや、ホントに。)読んでくださった皆様、ありがとうございます。感想などいただけると感激です。

是非貴方も参加してください!!

「意見や投稿を募集中の項目」

メンバーの募集やイベントの告知

中古品の売買などの投稿

Inde-X

「各項目」係

小説・コミック・同人誌などの読み物系作品

自分のバンドで演奏した曲やその他のインストウルメンタルなどの

音楽系作品

自主製作映画やCGアニメーションなどの映像作品

イラストやCGなどの絵画作品

Independent Works

「作品投稿」係

販売目的の場合、相談に応じて対処いたします。

MediaGroveの新しいコーナー

自分の考えやエッセイ、コラムの執筆者

自分の観点で、取材を行い、それを書きたい方

MediaGrove制作室「執筆者」係

編集・取材に参加してくれるスタッフ

MediaGrove編集室「スタッフ」係

左記の投稿は、すべて「reader@r7.1r.net」へ。

「Media Grove」では編集スタッフやライター、投稿者を募集しております。最近DTPをはじめたばかりで腕には自身がないという方でも大歓迎。私たちも素人ですので一緒に勉強しながら腕を磨いていきたいと思っています。興味のある方は左記までご連絡↓